

近代日本における洋書輸入に関する一考察

丸善関係書簡を中心に

柿本 真代*・中野 綾子**

仁愛大学人間生活学部*・明治学院大学教養教育センター**

A Study of the Import Foreign Books in Modern Japan: Looking at the import process and surrounding issues

Mayo KAKIMOTO and Ayako NAKANO

Faculty of Human Life, Jin-ai University* The Center for Liberal Arts, Meiji Gakuin University**

日本の近代化においては、外国書籍の輸入とそれによる情報・知識の獲得が重要な役割を果たした。それは1880年代に「翻訳書ブーム」といわれるほど翻訳書が流行したことからも知られる。

本稿では、日本における外国書籍の輸入の実態を明らかにする端緒として外国書籍の輸入販売を行っていた丸善の書簡について、翻刻・翻訳を行う。本稿で扱うのは、丸善からキリスト教外国伝道組織アメリカン・ボードの在日幹事に宛てられた書簡5通である。これらの翻刻・翻訳を通して、在日宣教師らが日本においてどのように自国の書籍を入手したのか、その一端を明らかにした。

キーワード：洋書、輸入、翻訳、丸善、宣教師、伝道

1 研究の背景と目的

福沢諭吉の「先づ洋法を採用するには、実地之探索は勿論候得共、逆も壺人にて僅之時日に尽しかたく、後は書籍取入れ候より外手段無之」¹との言葉にみられるように、日本の近代化において外国書籍の輸入と、それらによる情報・知識の修得は重要な役割を果たした。

そのことは、政府による大量の外国書籍の買い付けだけでなく、スマイルズ『セルフ・ヘルプ』の翻訳である中村正直『西国立志編』がベストセラーになったことや、「翻訳書ブーム」²と呼ばれるほど翻訳書が流行したという事実からも明らかである。政府が近代的な制度を作る上でも、一般の人々が人生の指針を得るためにも非常に重要な役割を果たしたのは、主に西洋諸国から輸入された外国書籍であった。

したがって、これらの翻訳書がどの外国書籍をどのように翻訳したのか、あるいは明治期の読者がどのように受容したのかについてはこれまで多くの研究がな

されてきた³。一方で、外国書籍の輸入や流通の実態については十分に明らかにされてきたとは言い難い⁴。

明治期から今日にいたるまで書籍輸入の分野で主導的な役割を担ってきたのは丸善であるが、これまでの外国書籍輸入に関する研究はほぼ丸善の社史に依拠してきた⁵。とりわけ『丸善百年史』は資料も充実しているが、消費者が丸善にどのように発注し、どのように個人が外国書籍を入手していたかについては詳細な記録がない。そのため、外国書籍がどのように輸入されたのか、また輸入された書籍を人々がどのように入手したのか、また翻訳の権利はどのように獲得されたのかなど、その詳細についてはほとんど明らかにされてこなかった。

かかる研究状況であったが、明治期の洋書輸入の一端を示す資料として、丸善が送った書簡類が発見された。それらが収められているのは、同志社大学人文科学研究所が所蔵する「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料」と呼ばれる資料群である。

アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) は、ボストンに本部を置くキリスト教外国伝道団体であり、明治初期から日本、特に関西地方を中心に宣教師を派遣した。アメリカン・ボードから派遣された宣教師らは、伝道および教育や医療に携わる中で、しばしば日本では入手しがたい英文の書物や洋服などの物資を必要とした。宣教師らは、必要な物資があると、神戸に駐在し給与管理など事務を担当していたジェンクス (Dewitt Clinton Jencks) に手紙で伝え、ジェンクスが何らかの方法でそれらの物資を調達し、それぞれの宣教師へ発送するという手続きをとった。

「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料」を整理した伊藤豊によると、この資料群には3000点あまりの書簡があり、その8割はジェンクス宛書簡であるという⁶。これらの資料群には丸善からの英文書簡や和文書簡ならびにアメリカ本国からの書簡や運搬会社からの送り状も含まれている。

これらの書簡は丸善の社史にも掲載されず、恐らくその存在も知られていないが、明治期日本の外国書籍輸入の実態を跡付ける最良の資料群といってよい。そこで、本研究では「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料」の中から丸善関連の史料を抽出し、それらの翻刻・翻訳を行う。この作業によって、近代日本における外国書籍輸入の一端を可能な限り克明に描き出すことを目的とする。

2 本稿で扱う史料について

同志社大学人文科学研究所蔵「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料」から、丸善に関わる書簡を抽出したところ、英文書簡4点、和文書簡1点の計5点であった。

目録番号および概要を年代順に示すと以下の通りである。

- (1) Box8-no.234 (188-.4.26)
- (2) Box8-no.238 (1883.5.17)
- (3) Box15-no.204 (1884.1.16)
- (4) Box14-no.217 (1886.8.31)
- (5) Box6-no.193 (1886.9.24)

なお、すべて送信者は丸善、受信者がジェンクスである。本稿では、以上の書簡の翻刻ならびに概要に加え、適宜丸善関係の資料から背景の補足を行う。

なお、一部翻刻できなかった箇所について、英文書簡は-で示してある。本稿に関わる資料調査は共著者である中野綾子に加え、明治学院大学教養教育センター助教田中祐介氏にもご助力いただいた。また英文書簡に関する翻刻・翻訳ならびに本稿執筆は主に柿本が、和文書簡に関する翻刻・翻訳は中野が担当した。

3 丸善について

まずは簡単に本稿が扱う時期の丸善について、社史を参考に確認しておきたい⁷。

創業者早矢仕有的は1837(天保8)年美濃の医師の家に生まれ、18歳のとき郷里の美濃で開業した。江戸に出たのち1837(慶応3)年には慶應義塾に入塾、福沢諭吉から商才を見出され、医師の傍ら福沢諭吉の著作の販売や医薬品や医療器具などの輸入を行う丸屋を横浜で開業した。創業当時は横浜の外国商社から間接的な輸入を行っていたが、次第に洋書や薬品のみならず、唐物店や仕立店も開業するなど多角的な経営を手掛けるようになり、1879(明治12)年には丸家銀行も設立、1880(明治13)年に改組、丸善商社とした。

しかし1884(明治17)年にデフレによって丸家銀行は破綻、1885(明治18)年からは二代目社長松下鉄三郎のもと、再建にむけて支店の整理などが実行されることとなった。

本稿で扱う書簡は、年代が判明しているもので1883(明治16)年から1886(明治19)年にかけてのものであり、ちょうど丸善の再建期のものである。

4 翻刻

(1) Box8-no.234

Tokio, 26th April 188-

Mr. Dewitt Jencks

Dear Sir,

We received your favorable letter dated 24th since we have sent out the postal card with each price.

And we have the pleasure to accept
your order but, as you know, our request
to you should be send [sic] out the amount
before, as well as, we will be send [sic] out
the books which you ordered very
soonerly [sic], we have no means to wait
you for the draft of the amounts only,

we remain.

Your's actively

Z. P. Maruya&Co.

本書簡は便箋1枚、封筒等はない。便箋は丸善製のもので、“Office of Z. P. Maruya & Co., General Importers and Exporters”と印字されている。発信地や年代についても“Yokohama, _____ 188”とすでに印字されており、下1桁を書き込む様式になっているが、発信地は“Tokio”と書き直され、下1桁の書き入れがない。ほかにも便箋の左上には“Branch Office”として東京、大阪、名古屋が挙げられている。

丸善は1880（明治13）年3月に東京へ本店を移転しており、また名古屋支店は1884（明治17）年ごろに譲渡されていることから、この4年の間に交わされた書簡とみられる。

書簡の内容をみると、「24日付の貴兄からの書簡拝受」とあり、何らかの取引の最中に交わされた書簡であることがわかる。一方、ジェンクスからの書簡を受け取ったのがすでに葉書にて各書籍の価格を書き送ったあとだったと続けられ、注文は受けるが「ご存知のように事前に総額を送っていただきたいのです。そうすれば小切手を待つ必要がありませんので、ご注文の書籍を速やかにお送りできます」と応じている。

和田桂子編『丸善と洋書』所収の「丸善商社洋書目録」（1888.1発行）によると、「当府外ヨリ御注文遠隔ノ地ヨリ御注文ノ節ハ前金御廻シ被下度且箱代運送費ハ別ニ申請候」とあり、箱代・運送費を含んだ前金を送ることを要求している⁸。

一方、『和洋書籍及文房具時価月報』68（1889.5.25）には「御送金ノ節ハ銀行為替又ハ郵便為替等其他御便利ヲ以テ御送附可被下但シ郵便為替ハ当地江戸橋東京郵便局ニテ請取ベキ様」とあり、また「代金ハ郵便切

手ヲ以テ御代用ノ節ハ一割増」ともあり、送金の方法は様々であったようである⁹。

以上を併せて考えると、この書簡で丸善側は十分な額の前金を事前に支払っておいてほしいとジェンクスに要求していることがわかる。次にみる和文書簡もまた、取引と金銭をめぐる内容である。

(2) Box8-no.238 （1883.5.17）

本月十五日御謁し御書面得相読候御申越し
趣洋物承知仕候値ハ先般書籍御注文と相
成候ニ付具代金御送付無之候テハ御送方出来
不申候様申上候処工面し御書面ニテハ下店之
請求ニ御驚被来候因下店ニ於テモ又相驚申候
然ニ貴所ニ於テハ書籍御前年之上代金御送
方之延引ハ無論無之事ニ存候得共下店
ニ於テハ地方へ送出ス書籍ハ悉諸前金
ニテ申請候ニ付人之何人ヲ問ハス下店之規則
ニ候間存候相御承知被下度具又前金
ニテ申請候テ書籍貴地ニ直達し若シ外ニ
云々等有之候節ハ何時ニテモ御取替申上候
前条之次第ニ付前金ニテ御送付方出来不
申候得共無様次第ニ付御注文ノ分御断申上候
先ハ貴答返如斯ニ御座候也

五月十七日

丸善洋書店

本書簡は唯一の和文書簡で封筒も遺されている。封筒には判で「東京日本橋通三丁目 丸善商社洋書店」とあり専用のものではなさそうだが、丸善製の便箋が使用されており、末尾に「東京日本橋通三丁目 丸善商社洋書店」と印字がある。

書簡は、「御申越し趣洋物」について承知した、という内容からはじまり、これがジェンクス側からの何らかの洋品の注文に対する返書であることがわかる。このあとには代金の話になり、以前の書籍注文に関する内容に続く。「具代金御送付無之候テハ御送方出来不申候様申上候処工面し御書面ニテハ下店之請求ニ御驚被来候因下店ニ於テモ又相驚申候」とあり、前金がないと送れないという丸善側の主張にジェンクスは驚き、丸善側もまた驚いた、というからどうやらジェンクス側は、前金制度ということをよく理解していな

かったようである。先にみた書簡でも前金での取引について依頼されており、当時の取引についての意思疎通が困難であったことがうかがわれる。

そもそも、ジェンクスはなぜ丸善に発注するようになったのか、その詳細は明らかではないが、丸善は自社の取扱目録である『和洋書籍及文房具時価月報』を1883（明治16）年ごろから発行、うち300部程度はJapan Directoryなどに住所が掲載されている日本在住の外国人に宛てて送っていたという¹⁰。ジェンクスの住所もまたディレクトリに記載されているため、ジェンクスが丸善に発注するようになったきっかけはこの『和洋書籍及文房具時価月報』が送られてきたことにあるのかも知れない。

1888（明治21）年に丸善に入社し洋書を担当した田中二郎によると、『月報』からの注文は相当あったとのことだが、地方から丸善への直接注文は少なく、地方の読者は最寄りの書店を介して丸善へ注文をしてきたという¹¹。同じく、『丸善百年史』でも「地方の顧客が、郵便で直接注文することは比較的少なかった」とあり、その要因を「荷物を発送する方法が、不便であったから」としている。「直接注文が盛んになったのは、明治二十五年に、小包郵便の取扱が開始されてから以後」であったようである¹²。

すなわち、この時点では神戸から注文するジェンクスのようなケースはまれであり、そのことが要因で双方に混乱を生じていたのではないだろうか。本書簡においても、地方への発送は諸経費を含めて前金での支払いが原則であることが強調されている。

さらに、この書簡では前金制は「人之何人ヲ問ハス下店之規則」と、誰との取引であっても前金制であるということも述べられている。田中の回想では、外国人客に対しては、靴を脱いで店にあがることや、丸善では値引きはしないことなどを理解してもらうのに骨が折れたとあり、外国人との取引の難しさがうかがえる¹³。「何人ヲ問ハス」と強調するのは、外国人との取引であっても、という含みがあったのかも知れない。

以上2通の書簡からは不慣れな地方との取引、さらに外国人との取引に苦心する丸善の様子がうかがわれる。

(3) Box15-no.204 (1884.1.16)

Tokio, 16th Jan. 1884

Mr. DeWitt C. Jencks

Dear Sir

Your favor of the 31st Dec. have how duly received and we here enclosed you a sample of a color paper as you have requested for use in making duplicate copies of writing, the price of which is 3 sen per shut and the size of shuts are same as enclosed one.

Hoping to hear from you after

We are D.---

Yours truly

K. Oyaidzu.

本書簡も封筒はなく、丸善製の便箋が用いられているが、(1) Box8-no.234とは異なる便箋である。便箋には支店として横浜、大阪のみが印字されている。

経営不振とそれによる支店整理によって、名古屋支店は1884（明治17）年に譲渡されたため、支店一覧からは名古屋が削除された新しい便箋が用いられているものと思われる。

差出人はK. Oyaidzu., 1873（明治6）年に入社し、のち書店支配人となる小柳津要人である。Z. P. MARUYA & Co., Limited. MARUZEN SHOKAIおよびManager.の部分のみ黒インクで判が押してある。

手紙の冒頭には「12月31日付のご依頼」とあり、ジェンクスからの注文に対する返書であることがわかる。color paperであり、なおかつmaking duplicate copies of writingという表現からみると、現在のカーボン紙のようなものだろうか。「大きさは同封のものと同じ」ともあり、見本紙が送付されたものとみられる。

丸善商社唐物店が発行していた取扱目録である「和洋品相場書」（1884.5）には、「製紙会社洋紙売捌」「製紙分社製筆揚板売捌」「製紙分社製筆揚板売捌」とあり、丸善では1878（明治11）年3月以降、王子製紙と指定売捌店の契約を結んでいる¹⁴。契約書によると、

丸善が紙に関する注文を受けることや、見本紙を丸善へ無償で預けおくことなどが取り決められている。また、王子製紙は「筆揚板」、いわゆる「蒟蒻版」の製造もしており、当時はこれによって少部数の複写が可能であった。

丸善では、これらの国産洋紙以外に1884（明治17）年には海外から洋紙を直輸入しており¹⁵、前述の「目録」にも「西洋紙類種々」「コッピー用油紙」の項目がある¹⁶。ジェンクスはこうした目録類をみて、書籍のみならず洋紙についても丸善へ発注したのかも知れない。

(4) Box14-no.217 (1886.8.31)

Tokio, 31st August 1886

Mr. Dewitt Jencks

kobe

Dear Sir,

In reply of yours esteemed favor of the 17th inst. we beg to state that as we are exceedingly busy just at now in printing the stated number of Dictionaries, we are regret [sic] that we are unable to let you know at what price your orders would be, however, as for you we shall certainly try to accommodate your wishes (Special printing -- -- to as your request) for 35 copies at the lowest price as possible, of should be possible we shall make you with the same price as common one which are 7.50 per copy. But we shall have to postpone the printing of your 35copies until after the stated number of Dictionaries have how struck off, therefore we shall confirm you in a future

Meanwhile, we remain,

Your's Respectfully

for Z. P. Maruya&Co. Limited.

MARUZEN SHOKAI

K. Oyaidzu

Manager.

本書簡は封書で、封筒・便箋ともにZ. P. Maruya& Co.の社名が入った丸善製のものである。便箋は (3)

Box15-no.204 (1884.1.16) とともに異なるもので、社名の書体が変わっているほか、住所の表記が14 NIHO NBASHI-DORISANCHOME.から14&15と変更されている。

また、(3) Box15-no.204と同様、社名・役職は判が用いられているが、こちらは赤インクである。本書簡も、当時書店の支配人であった小柳津要人の署名がある。

書簡は「当月17日付の貴兄からの御書簡にお答え」という内容からはじまり、8月17日付でジェンクスが注文を行っていたことがわかる。ところが、丸善は「辞書」の印刷に忙しく、ジェンクスからの注文がいくらになるかは知らせることができないという。その代わりに、「貴兄のご希望に添えるよう35部、可能な限り安価で」用意すると応じ、「1部7.50円の通常のものと同額で用意できる」見込みと伝える。

しかし、ジェンクスが依頼した35部については「定数の辞書」が刷り上がり次第になる、とも述べている。ここで繰り返し登場する「辞書」は、次の(5) Box6-no.193の葉書および時期や価格から、北米長老派教会の宣教師ヘボン (James Curtis Hepburn) による『和英語林集成』第3版のこととみてまず間違いないだろう。ヘボンは宣教医として1859（安政6）年に来日、施療の傍ら和英辞典『和英語林集成』を編纂するが、ミッション本部からの援助が得られずウォルシ・ホール商会のウォルシからの援助によって上海のミッションプレスである美華書館において『和英語林集成』を印刷する¹⁷。これは日本最初の和英辞典であり、英学を志す日本人にも、日本に滞在した外国人にも需要が高かった。福井藩や大学南校で教鞭を執ったグリフィス (William Elliot Griffis) は、「現在政界の長老となったり、天皇の背後の力となっている政治家たちがまだ少壮の学徒であった頃、彼らの間でこの辞書がどんなに珍重がられ、有り難がられていたかを、当時彼らを知っていた私はよく覚えている」¹⁸ と回想している。

ヘボンはその後も第2版、第3版と改訂・増補をするが、需要が高かっただけに販売店とのトラブルもあり、第3版にいたって「企業的にも…商業道德の点でも信頼の置ける」丸善へ版權を譲ることになり、ヘボンは「やっと満足した」という¹⁹。広告によると、第3版は

予約販売を行い、9月30日までに申し込んだ場合は通常の7円50銭から5円50銭に割引で販売された²⁰。製本が終わり、注文者へ発送が開始されたのは10月22日とあるため、この書簡の時点ではまだ予約期間中であった²¹。

丸善版の第3版『和英語林集成』の奥付によると、丸善は1886（明治19）年5月27日に「版權免許」を得ており、9月28日に「製本御届」となっているから、この書簡が送られた8月には印刷が佳境であったのだろう。しかし、ジェンクスは通常の『和英語林集成』を予約して購入しようとしたのではどうやらなさそうである。ジェンクスが発注したのは通常のものではなく、Special Printingを35部であり、これらを通常のものと同価格で提供できるようにする、と丸善側は説明する。ジェンクスが35部も発注しているのは、恐らくは日本語を習得するために宣教師らが求めたからだろう。この第3版は予約で1万8000部を刷ったというが、当時は英学の関心も高く、また来日宣教師が増加していたことから、非常によく売れたという²²。

ジェンクスが通常のものではなくなぜSpecial Printingのものを求めたのか、またどのような点が通常のものとは異なるのかについては現時点では不明だが、丸善が手掛けた出版物については、こうした個別の注文にも応じていたという点は興味深い。

(5) Box6-no.193 (1886.9.24)

Dear Sir

We wrote you 15th Sept.
referring to Dr. Hepburn's Dictionary
with enclosed paper printing it

Kindly reply you for ours
& oblige

24/9/86 for Z. P. MARUYA & Co., Limited.

MARUZEN SHOKAI

K Oyaidyu

Manager.

本資料は唯一の葉書である。(3) Box15-no.204と同

様、社名等は赤インクの判である。

ここでも『和英語林集成』の話題が出ており、(4) Box14-no.217のあと、9月15日にも手紙のやり取りがあったことがうかがえる。また、恐らくその手紙には『和英語林集成』の見本紙が封入されていたものとみられ、この葉書ではその確認となっている。

おわりに

本稿では、同志社大学人文科学研究所所蔵「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料」に収められた丸善からの書簡について、翻刻・翻訳を行った。

外国人宣教師は、本国に依頼すればただちに書籍や洋品を入手できたのではなく、まずは幹事に依頼し、さらに幹事は現地の業者である丸善を通して書籍や洋品を輸入しようとしており、それは決して容易なことではなかった。とりわけ初期の書簡では、注文と前金制度をめぐる、双方の意思疎通が円滑に行われず苦心する様子がうかがえた。

また、宣教師らは洋書のみならず、洋紙などの洋品、辞典についても丸善に発注していたことが明らかになった。丸善という場が、当時の異文化の接点として重要な役割を担っていたという側面もまた見逃せない。

本稿で扱ったのは、丸善からジェンクスに宛てられた書簡のみであったが、今後それぞれの宣教師からジェンクスにどのような書籍を求める依頼が来ていたのか、またジェンクスがこうした現地の業者とのやり取りをミッション本部にどのように報告していたのかについて、すでに整理されている、同志社大学人文科学研究所第1研究会『アメリカン・ボード宣教師文書資料一覧1869~1896年』（同志社大学人文科学研究所、1993）などと照らし合わせることによって、その流通の実態をより明確にすることができるだろう。こうした点については今後の課題としたい。

謝辞

資料の閲覧に便宜をおはかりいただきました同志社大学人文科学研究所ならびにスタッフの皆様にご感謝申し上げます。また、英文の翻刻にあたっては仁愛大学人間学部講師ロバート・ダイクス氏から、翻訳にあたっては明治学院大学教養教育センター助教田中祐介氏が

ら、また和文の翻刻については東北大学文学部助教河内聡子氏から、それぞれ格別のご助言を賜りましたことを記して感謝申し上げます。

本研究は仁愛大学共同研究費の助成を受けたものです。

引用文献

- ¹ 島津祐太郎宛書簡『福沢諭吉書簡集』1, 慶應義塾, 2001, 13頁.
- ² 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』春秋社, 1961.
- ³ 例えば、橋本美保『アメリカ教育情報受容の研究』風間書房, 1998は明治政府によるアメリカ教育情報の入手とその変化について、前田愛「明治立身出世主義の系譜：『西国立志編』から『帰省』まで」『文学』33(4), 1965.4, 岩波書店, 10-21頁はこうした翻訳書を明治の青少年がどのように受容したかを明らかにしている.
- ⁴ 羽生紀子は貿易資料を用いながら明治期の外国書籍の輸入量について分析しており, 1887(明治20)年がピークであったことを明らかにしている(「明治期日本出版と出版離陸, その後: 翻訳・輸入と海外出版市場」『鳴尾説林』9, 武庫川女子大学日本文学談話会, 2001.11, 1-12頁)が, 定量的な分析である.
- ⁵ 丸善の社史としては, 司忠編『丸善社史』丸善, 1951, 木村毅『丸善外史』丸善社史編纂委員会, 1969, 丸善株式会社編『丸善百年史: 日本の近代化と共に』上・下・資料編, 丸善, 1980-1981がある.
- ⁶ 伊藤豊「「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料」(仮題)の概要について」『山形大学紀要: 人文科学』17(1), 2010.2, 21-37頁. なお, 本資料群における新島襄からの書簡については, 北垣宗治「新発見の新島英文資料」『同志社談叢』34, 同志社大学同志社史資料センター, 2014.3, 1-33頁に翻刻・翻訳がある.
- ⁷ 脚注5参照.
- ⁸ 「丸善商社洋書目録」和田桂子編『丸善と洋書: コレクション・モダン都市文化』ゆまに書房, 2012, 605-740頁.
- ⁹ 丸善商社『和洋書籍及文房具時価月報』68, 1889.5.25, 838頁.
- ¹⁰ 同上, 7頁.
- ¹¹ 同上, 18頁.
- ¹² 前掲『丸善百年史』251頁.

- ¹³ 田中二郎述, 植草彦次郎記『丸善の横顔: 量販時代の回顧』1939, 8頁.
- ¹⁴ 同上, 259-262頁.
- ¹⁵ 同上, 272頁.
- ¹⁶ 前掲「丸善商社洋書目録」131頁.
- ¹⁷ 『和英語林集成』については, 木村一『和英語林集成の研究』明治書院, 2015および和英語林集成デジタルアーカイブス(明治学院大学図書館デジタルアーカイブス, 最終更新日2008.3.31)を参照した(最終閲覧日2018.11.28). <http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/>
- ¹⁸ W. E. グリフィス著, 高谷道男監修, 佐々木晃訳『ヘボン: 同時代人の見た』教文館, 1991, 138頁.
- ¹⁹ 同上, 139頁.
- ²⁰ 『東京日日新聞』1886.8.1.
- ²¹ 同上, 1886.10.22.
- ²² グリフィス前掲書, 139頁.

参考文献

- 岡部一興編, 高谷道男・有地美子共訳『ヘボン在日書簡全集』教文館, 2009
- 高谷道男『ドクトル・ヘボン』牧野書店, 1954
- 前田愛『近代読者の成立』有精堂, 1973

